主日の福音 2024/12/22(No.1329)

待降節第４主日(ルカ 1:39-45)

マリアは出かけて、急いで、ユダの町に行った

「そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。」（1・39-40）マリアの行動から、ご降誕直前の準備を学び取りましょう。

エリサベトとマリアの立場はずいぶん違います。エリサベトからすると、マリアは身分の高い人と映っています。言葉遣いが明らかにそうです。「あなたは女の中で祝福された方です。体内のお子さまも祝福されています。」（1・42）対等な話し方をしていません。

訪ねていく人のほうが身分は高い。私は10月に亡くなられた山内豊神父様を訪ねた中村大司教様のことを思い出しました。山内豊神父様は司祭団の一人ですが、中村大司教様は長崎大司教区の教区長です。明らかに大司教様の方が身分は高いと思います。

普通、挨拶に来る人と挨拶を受ける人とでは、挨拶を受ける人の方が身分が上です。この世の中では身分の高い人のところに挨拶に行くものです。しかしマリアは、この世の慣例を飛び越えて、エリサベトに挨拶に行きました。しかも、この朗読のあとに続く「マリアの賛歌」の中で、みずからを「身分の低い者」としたのです。「身分の低い、この主のはしためにも、目を留めてくださったからです。」（1・48）

中村大司教様もそうでした。自分を、低い者と受けとめ、危篤の状態にあった神父様を訪ねました。もし意識があるうちに訪ねていたなら、山内豊神父様はきっとエリサベトと同じことを大司教様に言ったでしょう。「私たちの大司教様が私の所に来てくださるとは、どういうわけでしょう。」（1・43）

マリア様自身も、聖霊の働きで子を宿している身でしたが、真っ先に考えたのは先に身重になったエリサベトを訪ねることでした。これにはどういう意味があるのでしょうか。真っ先に、自分を低くすることを考えた。そういうことではないでしょうか。

マリア様は、救い主を宿していることを知ったあと、身分にふさわしい生活を手に入れようとしたのではありません。真っ先に考えたのは、自分を「身分の低い、この主のはしため」とすることを考えたのです。救いの計画の、最高の協力者となるためです。

ご降誕を直前に控え、私たちはお手本としてマリアに倣うべきです。私たちも、クリスマス直前の準備のために、自分を低くすることを考えるべきです。私の生活の中で、自分を低くすることが可能でしょうか。訪ねてきてもらうのではなく、みずから訪ねていく人になれるでしょうか。

すでにマリア様は、私たちに模範を示してくださいました。真っ先に、自分を低くすることを目指しました。では私たちは、ご降誕直前に真っ先に思い浮かぶのは何でしょうか。浮かんだものが、自分を低くすること以外であれば、自分を低くする努力に順番を譲るべきです。する

と、マリアと同じ姿で御子を迎えることができます。

事実、救い主はマリアによってお生まれになりました。自分に起こる世界でただ一つの出来事を受け取るために、まず自分を低くする女性が、救いの計画の最大の協力者となったのです。

あなたも現代にあって、救いの計画の協力者になりたいですか？そうであるなら、まず自分を低くすること。ここから始めることにしましょう。神はいつの時代にも、自分を低くする者を顧みてくださり、協力者として用いてくださるのです。

主の降誕(夜半)(ルカ 2:1-14)